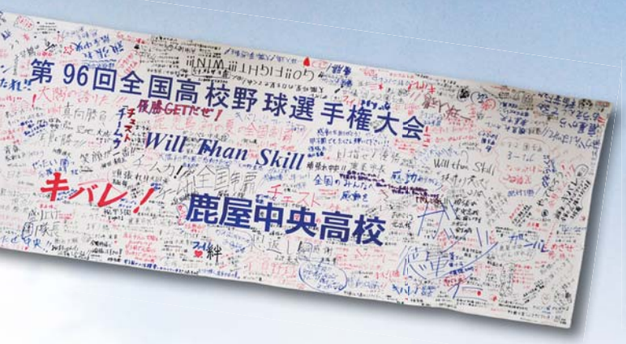


1回戦　VS. 市和歌山

市和歌山	0 0 0 1 0 0 0 0 0 0 0 0	1
鹿屋中央	0 0 0 0 0 0 0 1 0 0 0 1	2

（延長12回）

8月13日、第96回全国高校野球選手権大会の1回戦が甲子園球場で行われ、鹿屋中央高校と和歌山県代表の市立和歌山高校が対戦しました。

試合は、エースの七島投手が先発。序盤はランナーを背負う展開も粘りの投球を披露。ここ一番で内角へのストレートを投げ込むなど持ち味の強気の投球を続けます。

これまで相手の好守備に抑えられていた打線も、0対1で迎えた8回に奮起。先頭の代打西村選手がレフト前ヒットで出塁。川崎選手が犠打で進塁させると、徳重選手が値千金の同点打を放ちます。

この後打線が活気づき、県大会決勝と同様に逆転勝利の機運が盛り上がると、アルプス応援席の総勢5千人の大応援団も声援で後押しします。

最後は、延長12回、先頭の大田選手が出塁し、神田選手の犠打、山下選手のヒットで、1死1・3塁とチャンスを広げ、米澤投手が内野へゴロを放つと、3塁ランナーの大田選手が猛然とホームに突入しサヨナラ勝利。

熱闘を制した鹿屋中央高校は歴史を刻む勝利を手にし、熱狂に包まれた鹿屋市内は劇的な勝利にいつまでも酔いしれました。

2回戦　VS. 星稜

星稜	1 0 2 0 0 1 0 0 0	4
鹿屋中央	1 0 0 0 0 0 0 0 0	1

続く2回戦は18日、石川県代表の星稜高校と対戦しました。

初回に先制を許した鹿屋中央高校は、その裏に先頭の川崎選手が死球で出塁。吐合選手が犠打で進塁させると、主砲の木原選手がライトへタイムリーヒットを放ちすぐさま追いつきます。

しかし、3回に2点を許すと再び追いかける展開となり、伝統校の前に苦戦を強いられます。

最終回、甲子園初登板の空地投手に継投。気持ちのこもった投球で打者3人を3球で打ち取り、ナインを鼓舞します。

3点を追う最後の攻撃。四球と大田選手の左中間を破る2塁打で1死2・3塁と絶好のチャンスを作ると、逆転を信じたスタンドからは地響きのような声援が響きます。

1人アウトになった後、バッターが引っ張った打球は無情にも1塁へ。懸命のヘッドスライディングも届かず、鹿屋中央高校の夏は終わりました。

「大隅から初の夏の甲子園」というプレッシャーを力に変えて戦ってきた選手たち。

試合には敗れましたが、「夢をありがとう」「よく頑張った」とねぎらいの言葉と温かい拍手がいつまでも鳴りやむことはありませんでした。

「一緒に野球を」

吐合 駿一郎 選手
神田 耕太　選手

甲子園での一番の思い出は、「2人でゲッツーを取れたこと」と話すのは、内之浦出身で物心つく前からの親友であるショート吐合選手とセカンド神田選手。「高校から上手になった吐合。悔しくてライバル意識が芽生えた。ただ、吐合がいなければ自分はレギュラーになれていない」と振り返る神田選手。

進路が異なる2人は「また一緒に野球をやろう」と話してくれました。

「地元から甲子園を目指す」

山下 亮太 選手
廣森 大輝 選手

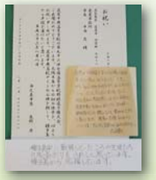
「鹿屋中央に入って大隅初の甲子園出場が夢だった」「迷うことなく鹿屋中央を選んだ」と語るのは、鹿屋市出身の山下選手と廣森選手。

自分はもちろん両親にも多数の励ましや支えがあったことを知り、結果で恩返ししたいと甲子園でも躍動。「幼い頃からの夢である地元鹿屋からの甲子園出場の夢が叶い、鹿屋中央に入って本当に良かった」と話してくれました。

「甲子園で深まる交流」

大田 豪　選手
木原 智史　選手
西村 将太朗 選手

3人の出身地である西之表市。西之表市長からの電報を始め、西之表市民から電話や手紙が届きました。また、交流先の種子島で甲子園初出場を知った鹿屋市子ども会の児童たちは、3人の活躍を願い応援旗を作成し、西之表市教育長に手渡しました。島民や子どもたちの声援を受けた3人の選手は甲子園で大活躍。「夢は甲子園」の思いで島を離れた3人は甲子園で一際輝いていました。



「3人で切磋琢磨」

七島 拓哉 投手
米澤 佑弥 投手
空地 大成 投手

「2人が良いピッチングをした次の試合は負けられない」と頑張った七島投手。「2人に負けたくないときつい練習に耐え成長できた」と語る米澤投手。「2人を超えることを目標にしていた」と感謝する空地投手。3人で切磋琢磨し掴み取った甲子園のマウンド。昨秋の大会で一人苦闘していたエースは、「米澤・空地が県予選・甲子園と本当に良いピッチングをしてくれた」と自分のことのように喜んでいました。